

解説書

キーボード・マスターのための
演奏能力開発エクササイズ

採譜・解説 / デイヴ・リミナ

リットーミュージック



目次

はじめに	5
------------	---

PART 1

Scales and Blues Techniques

●スケール&ブルース・テクニク	6
-----------------------	---

基礎知識:ミクソリディアン・スケール	8
--------------------------	---

exercise 1

mixolydian scale exercise ●ミクソリディアン・スケール・エクササイズ	9
---	---

exercise 2

mixolydian motives ●ミクソリディアン・モチーフ	10
---	----

基礎知識:ブルース・スケール	11
----------------------	----

exercise 3

blues scale exercise ●ブルース・スケール・エクササイズ	12
--	----

exercise 4

blues scale motives ●ブルース・スケール・モチーフ	14
---	----

exercise 5a

"crushed notes" ●クラッシュ・ノート	16
----------------------------------	----

exercise 5b

"blues trills" ●ブルース・トリル	17
--------------------------------	----

exercise 5c

blues motives with "crushed notes" ●クラッシュ・ノートを使ったブルース・モチーフ	18
--	----

exercise 6a

blues technique with "Chicago" style left hand, key C ●シカゴ・スタイルの左手を使ったブルース・テクニク (key C)	20
--	----

exercise 6b

blues technique with "Chicago" style left hand, key G ●シカゴ・スタイルの左手を使ったブルース・テクニク (key G)	22
--	----

exercise 6c

blues technique with "Texas" style bass line, key C ●テキサス・スタイルのベースラインを使ったブルース・テクニク (key C)	24
---	----

exercise 6d

blues technique with "Texas" style bass line, key G ●テキサス・スタイルのベースラインを使ったブルース・テクニク (key G)	26
---	----

exercise 7

blues comping with mixolydian triads ●ミクソリディアン・トライアドを使ったブルース・コンピング	28
---	----

exercise 8

blues tune #1, key G ●ブルース・チューン #1 (key G)	30
--	----

PART 2

Ear Training, Rock and Blues Phrasing

●音感トレーニング~ロック&ブルース・フレージング	32
---------------------------------	----

基礎知識:ミクソリディアン・スケールの音程	34
-----------------------------	----

exercise 9

understanding intervals within the mixolydian scale ●ミクソリディアン・スケールの音程の把握	35
---	----

基礎知識:ブルース・スケールの音程	36
-------------------------	----

exercise 10

understanding intervals within the blues scale ●ブルース・スケールの音程の把握	37
---	----

exercise 11

rock motives and phrases, key C ●ロック・モチーフ&フレーズ (key C)	38
--	----

exercise 12a-c

rock "call and response" #1-3, key C ●ロック"コール&レスポンス" #1-3 (key C)	40
---	----

exercise 13

rock comping ●ロック・コンピング	46
-------------------------------	----

exercise 14

rock/blues phrasing technique, key G ●ロック/ブルース・フレージング・テクニク (key G)	48
---	----

exercise 15

mixolydian thirds, key G ●ミクソリディアン・サード (key G)	50
--	----

exercise 16

mixolydian thirds, key C ●ミクソリディアン・サード (key C)	52
--	----

exercise 17

mixolydian thirds, key F ●ミクソリディアン・サード (key F)	54
--	----

exercise 18

mixolydian thirds, key B ^b ●ミクソリディアン・サード (key B ^b)	56
---	----

PART 3

2 Hand Grooves ●両手によるグルーヴ	58
---------------------------------	----

exercise 19

"Texas shuffle" comping, key B ^b ●"テキサス・シャッフル"コンピング (key B ^b)	60
--	----

exercise 20a-d

2 hand funk technique #1 ●両手を使ったファンク・テクニク #1	62
--	----

exercise 21

funk groove 1, key G ●ファンク・グルーヴ 1 (key G)	63
---	----

exercise 22a-b

2 hand funk technique #2 ●両手を使ったファンク・テクニク #2	64
--	----

exercise 23a-b

2 hand funk technique #3 ●両手を使ったファンク・テクニク #3	65
--	----

exercise 24

"Roots" rock & roll piano ●"ルーツ"ロックン・ロール・ピアノ	66
--	----

exercise 25

Latin comping "Montuno" ●ラテン・コンピング"モントゥーノ"	69
--	----

exercise 26

funk groove 2 "Slow super funk" ●ファンク・グルーヴ 2 "スロー・スーパー・ファンク"	70
--	----

PART4

Jazz Comping, Guide Tone Voicing and Rhythms●

ジャズ・コンピング／ガイド・トーン・ヴォイシングとリズム ……72

基礎知識：ガイド・トーン・ヴォイシング ……74

exercise27a-b

guide tone voicings(II-V progression with tension 9, key C)

●ガイド・トーン・ヴォイシング／9thのテンションを加えたII-V進行 (Key C) ……75

exercise28a-b

guide tone voicings(II-V progression with tension 9 &13, key F)

●ガイド・トーン・ヴォイシング／9thと13thのテンションを加えたII-V進行 (key F) ……76

exercise29a-b

guide tone voicings(II-V progression with tension 9, key G)

●ガイド・トーン・ヴォイシング／9thのテンションを加えたII-V進行 (key G) ……77

exercise30a-b

guide tone voicings(II-V progression with tension 9&13, key B^b)

●ガイド・トーン・ヴォイシング／9thと13thのテンションを加えたII-V進行 (key B^b) ……78

exercise31a

ex.27b with “walking” bass●ウォーキング・ベースを加えた27b ……79

exercise31b

ex.28b with “walking” bass●ウォーキング・ベースを加えた28b ……80

exercise31c

ex.29b with “walking” bass●ウォーキング・ベースを加えた29b ……81

exercise31d

ex.30b with “walking” bass●ウォーキング・ベースを加えた30b ……82

デモ演奏について ……83

おわりに ……85

プロフィール ……86

はじめに

このビデオでは、私が実際にバークリー音楽院の授業で使用している基本的なエクササイズを紹介しています。ブルース、ファンク、ロック、ジャズに必要なハーモニー、メロディ、リズム・パターンをしっかりと修得できるように、各エクササイズを注意深く選びました。またエクササイズ自体が音楽的であるよう考慮しました。すべてのエクササイズ及びコンセプトは、私のプロ・ミュージシャンとしての経験から生まれてきたものです。

練習の際は、私がこの解説書で指摘している点、つまりそれぞれのスタイルの持つ感じや特徴をうまく出すようにしてください。またエクササイズをこなせるようになったら、同じことを他のキーでも試してください。ビデオを見るのはもちろんのこと、この解説書もよく読んで、各エクササイズの目的や練習方法をしっかりと理解しましょう。

中には難しいエクササイズもあるでしょう。それでも忍耐強く、自分のペースで練習を続けてください。これらのエクササイズの効果は、私のバークリーでの長年にわたる経験からも実証されています。

これらのエクササイズにおいてはリズム感も非常に重要です。私はこれまで、自分の生徒たちが即興的なスタイルを学ぶ時に、ハーモニーに気をとられるあまりリズムをおそろかにしてしまう姿を何度も見てきました。しかしたいのポピュラー音楽は限られたハーモニーしか使っていないものです。むしろそのスタイルを決定付けているのは、フィーリングやリズムであることが多いのです。

さらに私はこのビデオの中に、基礎的なテクニックや概念と、誰もが弾けるようになりたいと思うような面白いリックとを、うまく両立させようと思いました。

プレイヤーとしてのレベルがどうであれ、音楽的で表情豊かな演奏をすることは可能です。その時々自分のレベルに自信を持ちましょう。それが音楽的な自由を手にするための秘訣です。

私はこれまでに、優れたテクニックと豊かなハーモニーの知識を持ちながらも演奏自体はどこか物足りなくなってしまう生徒をたくさん見てきました。その反対に、技術や知識が劣っていても実に興味深い演奏をする生徒がいます。

皆さんも自分の能力を信じ、楽しみながらこのビデオを見てください。

それでは始めましょう!

PART 1

Scales and Blues Techniques

スケール&ブルース・テクニク

このパートではミクソリディアン・スケールとブルース・スケールのハーモニー、そしてブルースのテクニクを扱っています。

exercise1~4ではブルースやロック、ファンクなどの音楽におけるハーモニーの実際例を紹介しています。ここでは実際に耳にしている音が理論上ではどうなっているのかを理解することが重要です。ミクソリディアン・スケールやブルース・スケールを使うことによって、メロディックでハーモニックな“コンピング”(ハーモニーとリズムにもとづいた即興的な伴奏)のパターンを作ることでもあります。

exercise5aで登場する“クラッシュ・ノート”とは、グレース・ノート(装飾音)のことです。ブルース、ロック、ファンクの演奏では、1本の指を鍵盤から鍵盤へ滑らせることでクラッシュ・ノートを出すことが多いです。このクラッシュ・ノートと、exercise5bで出てくる“ブルース・トリル”は、その後のエクササイズにもよく出てきます。

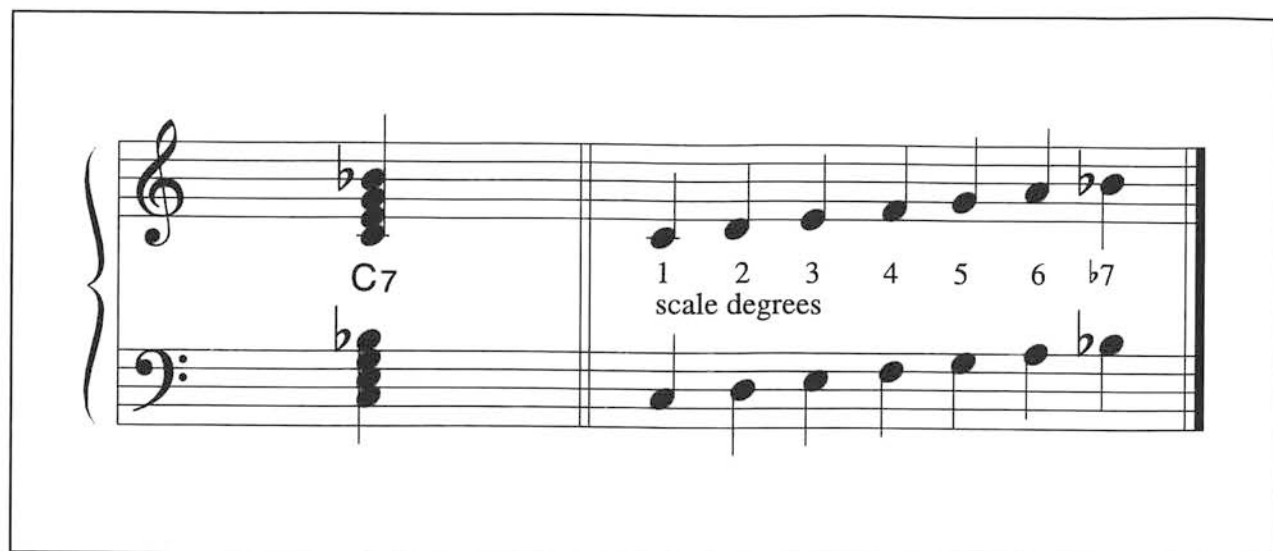
exercise6a~6dで紹介するのはブルース・テクニクですが、ロックやファンクで使うことも可能です。この練習は自分のその時々レベルに合った形で行なってください。そして手に負担をかけないように注意してください。力を入れすぎず、リラックスした状態を保ち、痛みを感じたらすぐ休むようにします。これらのエクササイズによって、手に力が付き、フレーズが覚えられ、それを弾く時のハンド・ポジションも覚えられます。そして最終的な目標は、それぞれのスタイルにおけるハーモニックでメロディックなボキャブラリーを身に付けることです。つまり練習の手始めには良いものばかりなのです。

exercise7ではトライアド(3和音)を取り上げました。多くの優れたプレイヤーが、トライアドを使ったコンピングを行なっています。ドミナント7thコードのハーモニー含んだこれらのトライアドが、ミクソリディアン・スケールから出来ていることを理解してください。これがドミナント7thコードを弾く時の、もうひとつのやり方とも言えるわけです。このエクササイズではペダルを使わないでやりましょう。

exercise8はPART1で学んだテクニクを網羅した練習曲です。ブルース・シャッフル・フィールをうまく出して演奏してください。

では楽しみながら練習しましょう。

基礎知識：ミクソリディアン・スケール



The image shows a musical score for a C7 chord and its corresponding Mixolydian scale. On the left, the C7 chord is shown in both treble and bass clefs. On the right, the Mixolydian scale is shown in treble clef, with notes labeled 1 through 7b. The notes are: C4, D4, E4, F4, G4, A4, Bb4.

CミクソリディアンのハーモニーはC7コードを基にしています。

Cミクソリディアン・スケールはCメジャー・スケールの第7音をフラットさせたものと言えます。

ブルース・スタイルはミクソリディアンのハーモニーから成り立っています。

この“コード・スケール”でメロディやコンピングのパターンを作ることができます。

exercise 1

mixolydian scale exercise ● ミクソリディアン・スケール・エクササイズ



The image shows a musical score for exercise 1, which is a Mixolydian scale exercise in C7. The exercise is written in treble and bass clefs. The tempo marking is "half note = 55". The exercise consists of two measures, each with a repeat sign. The first measure is an ascending scale, and the second measure is a descending scale. Fingerings are indicated by numbers 1-5. The notes are: C4, D4, E4, F4, G4, A4, Bb4.

主な目的

- ミクソリディアンのハーモニーに親しむためのエクササイズです。ブルースやロックに適したハンド・ポジションも身に付きます。

練習方法

- メトロノームは2拍目と4拍目で鳴らします。言い換えれば、メトロノームの音を2拍目、4拍目として捉えながら演奏するという事です。これで練習した方が、すべての拍でメトロノームを鳴らすよりもタイム感が身に付きやすくなります。この後のエクササイズも特にことわり書きがない限りは同じやり方で行なってください。
- ブルース・シャッフル、またはスウィング・フィールで弾いてください。
- F, B^b, Gのキーでも練習してください。これらはブルースやロックの練習を始めるのに良いキーです。

ポイント

- 複数のキーで練習することが大切です。C, F, B^b, Gのキーがうまく弾けるようになったら、その4つを続けて弾く練習もしてください。

補足

- エクササイズを4つのキーですぐ弾ける人は、12のキーすべてを続けて弾く練習をしてください。その際のキーの順序は、Cから始まる“5度圏”に従うようにしましょう(C⇒F⇒B^b⇒E^b⇒A^b～)。

exercise2

mixolydian motives ● ミクソリディアン・モチーフ

half note = 55

主な目的

- ミクソリディアン・スケールの音が、モチーフやメロディなどでどのように使用されているかを理解するための練習です。

練習方法

- スウィング・フィールで弾いてください。
- F, B^b, Gのキーでも弾いてみましょう。

ポイント

- 個々のモチーフがスケールの5thまたは1stの音で終わっている点に注目してください。

補足

- 音楽を聴いている時も、そこにこのようなモチーフが出てくるかどうか注意してみましょう。そして自分でも同じキーで演奏してみましょう。

基礎知識：ブルース・スケール

scale degrees.

キーCのブルース・スケールです。

これをいわゆる“単なるスケール”としては考えないことが大切だと私は思っています。というのも、私たちはしばしばスケールに頼りすぎた演奏をしてしまうことがあり、その結果、音楽的ではなくなってしまうことが多いからです。だから私はこのようなスケールを、フレーズを作る時に使う“音のまとまり”としてとらえるようにしています。いかなる音楽理論も、それ自体が最初にあったわけではなく、耳に聴こえるものを解釈した結果生まれてきたものであるということを忘れないでください。

理論の話はさておき、ブルースを聴く時は、モチーフやフレーズに注意してみましょう。この“スケール”が使われているはずですよ。

exercise3

blues scale exercise ● ブルース・スケール・エクササイズ

half note = 55

4 x's

主な目的

- 私が“ブルース・フレーズ・ポジション”と呼んでいるものに慣れてもらうためのエクササイズです。ポジションだけでなく、フィンガリングにも注目してください。こういったポジションやフィンガリングは、ブルースの演奏にとっても適しています。

練習方法

- 両手、片手のみ、の両方で練習します。
- ビデオをよく見て、私と同じフィンガリングで弾いてください。私の経験では、これが大部分の生徒にとってもっともやりやすいフィンガリングです。しかし、もしうまくいかないのであれば、自分のやり方でも構いません。
- シャッフル・フィールで弾いてください。
- 慣れてきたらF、B^b、Gのキーでも弾き、最終的には12のキーすべてで練習します。

ポイント

- キーが変わるとフィンガリングも変わってくるでしょう。自分なりに弾きやすいフィンガリングを見つけてください。

補足

- テンポも変えてみましょう。
- 何かの曲と一緒にこのエクササイズを弾く練習もしてみましょう。その際は、その曲と同じキーで弾くことはもちろん、曲の感じを損なわないように注意しましょう。

exercise4

blues scale motives ● ブルース・スケール・モチーフ

C7 half note = 65
mf

F7

C7

G7

F7 C7

主な目的

- ブルース・スケールによるメロディックなモチーフを身に付ける練習です。左手のシンコペーションの練習にもなります。

練習方法

- シャッフル・フィールで弾いてください。
- ビデオと同じフィンガリングで弾くようにしましょう。

ポイント

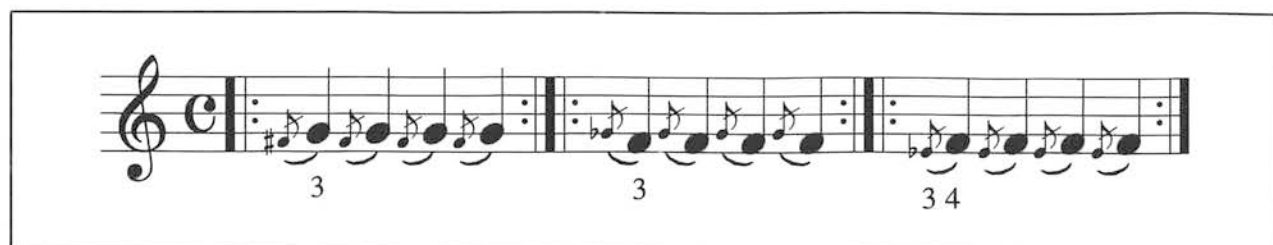
- ビデオでは2コーラスしか弾いていませんが、もっとくり返してもよいでしょう。
- 必要であれば片手ずつ練習しても構いません。

補足

- アクセントに注意して弾いてください。
- このようなエクササイズでも、実際の曲だと思って弾くことが大切です。

exercise5a

“crushed notes” ●クラッシュ・ノート



主な目的

- クラッシュ・ノートの練習です。

練習方法

- 私の演奏をビデオでよく見てください。
- 1小節目では指をF#からGへワン・モーションでスライドさせます。2小節目のGからFも同じく1本指でのワン・モーションです。
- 3小節目では薬指と小指を使います。これは装飾音の正統的な弾き方です。

ポイント

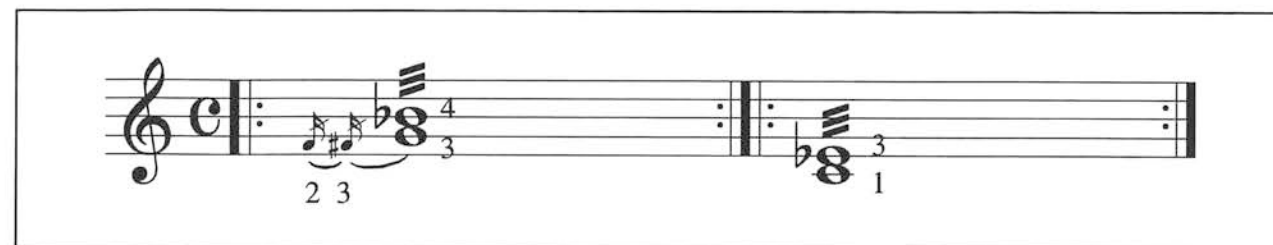
- 私と同じやり方で弾きにくければ無理にやることはありませんが、この方法によって適切なサウンドが出せることは確かです。
- クラッシュ・ノートのテクニックを発展させることで、シンガーや他の楽器がやるようなピッチ・ベンドに近い効果を出すことも可能になります。

補足

- キーが変わるとクラッシュ・ノートの出し方も変わってきます。指1本でのスライドが使いにくいキーの場合は、正統的なやり方でクラッシュ・ノートを弾くしかありません。またこの理由から、多くのキーボード・プレイヤーはGのキーのブルースを好んでいます。

exercise5b

“blues trills” ●ブルース・トリル



主な目的

- ブルースやロックのトリルに慣れる練習です。

練習方法

- ふたつの短3度音程をそれぞれ数秒間トリルします。
- それに慣れたら、今度はテンポに合わせて、それぞれのトリルを数小節ずつ続けます。
- 他のキーでも練習してください。
- 1stと^b3rd, 5thと^b7thのトリルもやってみましょう。

ポイント

- 最初は筋力の強い指同士(親指+中指, 中指+薬指, 中指+小指など)を使って練習し、それから比較的筋力の弱い指同士(薬指+小指)を試すようにしましょう。

補足

- トリルは的確なサウンドを出すための強力な武器になります。
- 1stと5thのトリルも試してください。

exercise5c

blues motives with “crushed notes”

- クラッシュ・ノートを使ったブルース・モチーフ

C7

C7

F7

C7 half note = 55

G7 F7

C7

主な目的

- 12小節のブルース曲でクラッシュ・ノートを練習します。

練習方法

- 実際のブルース曲と思って演奏してください。

ポイント

- クラッシュ・ノートを自分がどういうやり方で弾いているかに注意しながら練習しましょう。そして的確なサウンドを出すようにしてください。
- ビデオでは1回通して弾いているだけですが、2回続けて弾く練習もしてください。

※編注：ビデオでは1コーラスしか弾いていなくても、くり返し弾けるものは譜面にリピートマークが付いています。以降の譜面も同様です。

exercise6a

blues technique with "Chicago" style left hand, key C

●シカゴ・スタイルの左手を使ったブルース・テクニック(key C)

half note=55

主な目的

- ブルース、ロック、ファンクのヴォキャブラリーとして使えるブルース・テクニックを身に付けます。
- 何度もくり返し練習することで手の筋力も鍛えられ、それによってフレーズもよりの確に弾けるようになります。
- 左手はシカゴ・スタイルで演奏します。

練習方法

- シャッフル・フィールで弾いてください。
- ビデオでは1回しか弾いていませんが、実際には何回か繰り返し演奏してください。
- 慣れてきたらキーをF, B^b, Gに変えてみましょう。

ポイント

- 先にあげた4つのキーで弾けるようになったら、その他8つのキーでも練習します。私はキーがBやC#のブルースもよく弾きます。
- 私のフィンガリングをビデオでよく見てください。自分なりのフィンガリングで弾く際も、強い指を使ってフレーズを弾くことです。
- 手に負担をかけないように注意しましょう。鍵盤の上では、手の力を抜き、リラックスしていなければいけません。疲れたら少し休めます。
- これに続くexercise6b-dも含め、これらのブルース・テクニック・エクササイズには皆さんが思う以上の内容があります。あせらず時間をかけてやりましょう。

exercise6b

blues technique with "Chicago" style left hand, key G

●シカゴ・スタイルの左手を使ったブルース・テクニク(key G)

half note = 55

half note = 55

主な目的

●前のエクササイズと同様です。

練習方法

●前のエクササイズと同様です。

ポイント

- 個々のフレーズが、このキーのルートであるGで終わっている点に注目してください。
- 先にあげた4つのキーで弾けるようになったら、残りのキーにも挑戦してください。
- 的確かつフィーリングのある演奏になるよう、がんばってください。
- くり返しになりますが、手に負担をかけないようにしましょう。

exercise6c

blues technique with "Texas" style bass line, key C

●テキサス・スタイルのベースラインを使ったブルース・テクニック(key C)

half note = 55

主な目的

- 同じくブルース・テクニック・エクササイズです。クラッシュ・ノートとテキサス・スタイルのウォーキング・ベースラインの練習になります。

練習方法

- シャッフル・フィールで弾いてください。
- 何回か通してみましよう。慣れてきたら他のキーでも演奏してみます。

ポイント

- ベースラインはスタッカートではいけません、粒が立つように弾いてください。それによってアコースティック・ベースのようなサウンドが生まれ、スウィング感が出ます。

補足

- クラッシュ・ノートを正確に弾くことが大事です。それによってモチーフに表情が生まれます。ブルース・シンガーのピッチをベンドさせる歌い方を真似てみるのも良いでしょう。

exercise6d

blues technique with "Texas" style bass line, key G

●テキサス・スタイルのベースラインを使ったブルース・テクニク(key G)

half note = 55

主な目的

●4分音符のベースラインに8分音符の3連符を乗せる練習です。

練習方法

- これまでと同様にシャッフル・フィールで弾きます。
- すべてのキーで練習してください。

ポイント

●右手が疲れやすいかもしれません。無理をせず、疲れてきたら休みましょう。音楽を演奏することは技術を見せることではありません。自分の耳に聴こえたものを確実に演奏できるようになれば、最初は難しく思えたことも徐々に楽に弾けるようになっていきます。

補足

●exercise6a-dの4つのブルース・テクニク・エクササイズはぜひ続けてください。これらを組み合わせて練習するのも良いですし、これらのフレーズを参考にしながら自分なりのソロを組み立ててみるのも良いでしょう。それでスウィング感が出てくればしめたものです。

exercise7

blues comping with mixolydian triads

●ミクソリディアン・トライアドを使ったブルース・コンピング

Shuffle C7 half note=55

C7

F7

C7

G7 F7

C7 G7

主な目的

- ミクソリディアン・スケールやブルース・スケールの構成音でできたトライアドをコンピングに使う方法を紹介しつゝ、コンピングには様々なタイプのトライアドが使えますが、ブルースやロック、ファンクには、ここで紹介するミクソリディアン・トライアドが頻繁に登場します。

練習方法

- シャッフル・フィールで弾いてください。
- 慣れてきたら他のキー(F, G, B^bなど)でも練習しましょう。

ポイント

- ここではミクソリディアン・ハーモニーとして、それぞれのコード上のルートから5度と6度の位置にあるマイナー・トライアドが使われています。つまりC7のハーモニーの上ではGminとAmin、F7ではCminとDmin、G7ではDminとEminのトライアドが使われているわけです。

補足

- これらのパターンは、ブルース・シャッフルのソロやメロディのバックでコンピングを行なう時にとても効果的です。
- このようなトライアドを使ったコンピング・パターンを、自分でも考えてみてください。トライアドを転回する手もあります。

exercise8

blues tune #1, key G ● ブルース・チューン #1 (key G)

主な目的

- ここまでで覚えたことを使ってブルース曲を弾きます。それぞれのテクニックがどのように組み合わせられているかに注意してください。

練習方法

- 実際の曲のつもりで演奏してください。
- シャッフル・フィールで弾いてください。

ポイント

- この練習曲には、ブルースでよく聴かれるハーモニーやリズムが数多く入っています。イントロや“ターンアラウンド”(最後の4小節)も典型的なフレーズです。
- 他のキーでも試し、テクニックを自分のものにしていきましょう。

PART2

Ear Training, Rock and Blues Phrasing 音感トレーニング～ロック&ブルース・フレージング

音楽をやる上で音感はとても重要です。優れたミュージシャンは誰もが鋭い音感を持っていますし、そのための練習も欠かしていません。本人たちはそうとは意識していなくても、常に音感を鍛えるトレーニングを行っています。

皆さんも、曲と一緒に演奏しながらソロやヴォーシング、メロディ、コード進行などについて学ぶことがあるでしょう。それはただ曲を覚えるのが楽しいからやっているのかもしれませんが。しかしそれによって知らず知らずのうちに音感も鍛えられているのです。

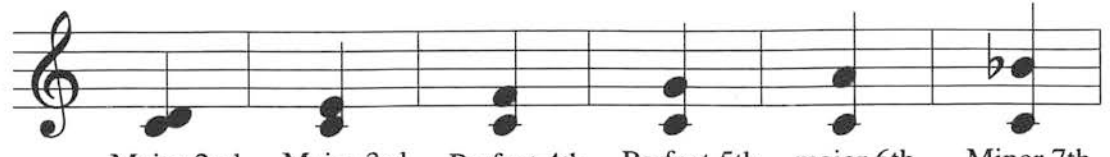
音楽教育の中でありがちな問題は、教える側が自分の音感の良さを当然のものと思っていることです。彼らはプレイヤーとしてすでに成熟しているわけですし、一度鍛えられた音感が以前のレベルに逆戻りすることもないからです。一方、教わる側は読譜や音楽理論、演奏テクニックなど、上達の程度が明らかになりやすいことばかりに熱中する傾向があります。その結果、音感を鍛えるための練習は軽視されることになります。実際、今の音楽教育は技術的な事柄に終始しがちで、耳のトレーニングを無視しているものが少なくありません。

皆さんに知ってほしいのは、理論やテクニックはあくまでも手段でしかなく、それ自体から音楽が生まれてくることはないということです。音楽はやはり自分の内部から生まれてくるのです。優れたミュージシャンの中には正規の音楽教育を受けていない人が少なくありません。彼らは楽譜は読めなくても素晴らしい演奏ができます。彼ら“無学の”ミュージシャンたちは、自分の耳だけを頼りに音楽を学んでいったのです。

以上のような理由から、私はこのパートの前半をメロディックな断片やモチーフを認識するための音感トレーニングに当てることにしました。そもそもメロディの素材は音程によって作られています。したがって、音程を理解することが最初のステップになります。それを理解すれば、例え名前として覚えなくても演奏はできるようになります。まずはexercise9と10の手前にあるふたつの「基礎知識」の譜面を弾いてみてください。どちらもブルースやロックによく出てくる音程です。これらを自分の知っている曲のメロディと関連づけて覚えてください。そしてexercise9と10で、各音程が実際にはどんな使われ方をするのかを見てください。

後半では、ブルース及びロックの典型的なボキャブラリーをいくつか紹介しています。中でもexercise15～18に出てくる“ミクソリディアン・サード”はフレーズ作りにとっても有効で、ソロにもコンピングにも使えます。ここで示した4つのキーはどれも自然なフィンガリングで弾けますが、キーによってはフィンガリングがかなり難しくなります。とりあえずこうしたフレーズはまるごと覚え、自分のスタイルに取り入れてしまうのが得策でしょう。

基礎知識：ミクソリディアン・スケールの音程



Major 2nd. Major 3rd. Perfect 4th. Perfect 5th. major 6th. Minor 7th.

ミクソリディアン・スケールの各音のルートに対する音程を示しました。

それぞれの音程が持つサウンドを覚えてください。ブルースやロックのモチーフを通じて覚えるのが近道です。

exercise9

understanding intervals within the mixolydian scale

●ミクソリディアン・スケールの音程の把握



half note = 55

maj. 3 P5

maj.3 P4 P4 P5 min.7

maj.3 P4 min.7 P5

主な目的

- ミクソリディアンのモチーフやフレーズを、ある音程においてどのようにハーモナイズできるかを示した例です。各音程の使い方を覚えてください。

練習方法

- ハーモナイズされた部分(譜面中に音程を書き込んだ部分)では、いったん手を止めて2つの音を交互に弾いたり、その音程を口で歌ったりしてみてください。

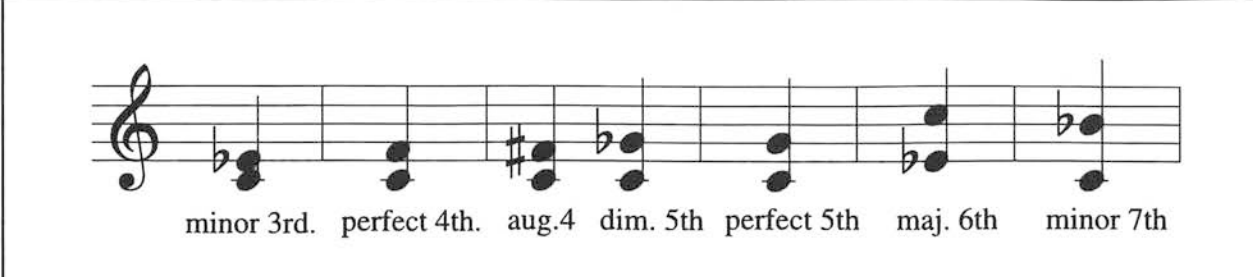
ポイント

- 音感を養うための第1歩として、これらの音程の把握は重要です。インプロヴィゼーションを行なう時も、耳にしたフレーズをなぞって弾く時も、これらの音程の感覚がよりどころとなります。

補足

- 音楽を聴く時に、音程を意識するようにしましょう。時には音楽を止め、聴こえた音を口ずさんでみてください。そこでの自分の認識が正しかったかどうかを、さらに楽器を弾いて確認してみましょう。

基礎知識：ブルース・スケールの音程



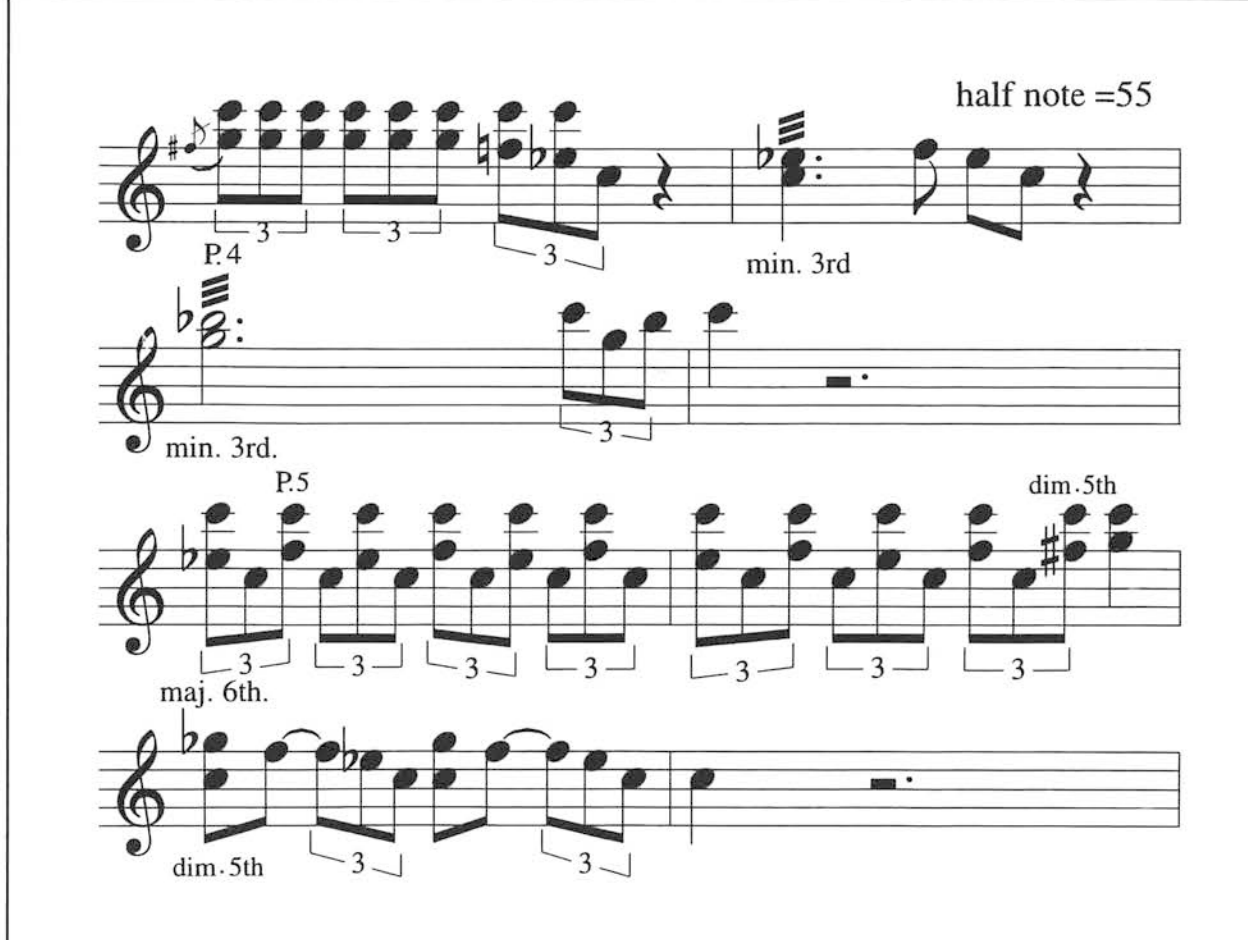
minor 3rd. perfect 4th. aug. 4 dim. 5th perfect 5th maj. 6th minor 7th

ブルース・スケールにおけるハーモニーのうち、主な音程を示しました。

exercise 10

understanding intervals within the blues scale

●ブルース・スケールの音程の把握



half note = 55

P.4 min. 3rd

min. 3rd.

P.5 dim. 5th

maj. 6th.

dim. 5th

主な目的

- ブルースのモチーフやフレーズを、ある音程においてどのようにハーモナイズできるかを示した例です。

練習方法

- 前のエクササイズと同様です。

ポイント

- ブルースではこれらのフレーズが頻繁に使われます。ぜひ自分のものにしてください。

exercise 11

rock motives and phrases, key C

●ロック・モチーフ&フレーズ (key C)

quarter note= 117

Musical notation for exercise 11, first system. Treble clef, C major. Right hand: quarter rest, then a triplet of eighth notes (F#, G, A) with a 5th finger on A, followed by a quarter note B. Left hand: quarter rest, then a Bb chord, followed by F and C chords.

Musical notation for exercise 11, second system. Treble clef, C major. Right hand: quarter rest, then a triplet of eighth notes (Bb, A, G) with a 3rd finger on Bb, followed by quarter notes F, E, D. Left hand: Bb, F, and C chords.

Musical notation for exercise 11, third system. Treble clef, C major. Right hand: quarter rest, then quarter notes G, F, E, D. Left hand: Bb, F, and C chords.

Musical notation for exercise 11, fourth system. Treble clef, C major. Right hand: quarter rest, then quarter notes G, F, E, D. Left hand: Bb, F, and C chords.

Musical notation for exercise 11, fifth system. Treble clef, C major. Right hand: quarter rest, then a triplet of eighth notes (F#, G, A) with a 3rd finger on F#, followed by a triplet of eighth notes (Bb, A, G) with a 3rd finger on Bb, then a quarter note B. Left hand: Bb, F, and C chords.

Musical notation for exercise 11, sixth system. Treble clef, C major. Right hand: quarter rest, then quarter notes G, F, E, D with fingerings 5, 5, 5, 5. Left hand: Bb, F, and C chords.

Musical notation for exercise 11, seventh system. Treble clef, C major. Right hand: quarter rest, then a triplet of eighth notes (Bb, A, G) with a 5th finger on Bb, followed by quarter notes F, E, D with fingerings 3, 2, 1. Left hand: Bb, F, and C chords. A "rit." marking is present below the bass line.

Musical notation for exercise 11, eighth system. Treble clef, C major. Right hand: quarter rest, then quarter notes G, F, E, D. Left hand: Bb, F, and C chords.

主な目的

- ブルース及びロックのモチーフを、ロックのヴァンプを通して学びます。

練習方法

- メトロノームはすべての拍(1, 2, 3, 4)で鳴らします。
- 右手と左手を別々に練習してから両手で弾いてみましょう。

ポイント

- クラッシュ・ノートは正確に弾きましょう。
- すべてのモチーフがCのキーに解決しているのがわかると思います。

補足

- 左手のヴァンプを弾きながら、自分なりのモチーフを弾いてみましょう。

exercise 12a-c

“call and response” #1-3, key C

●ロック“コール&レスポンス” #1-3 (key C)

a #1

"call"

quarter note =117

"response"

"call"

"response"

次ページへ続く

主な目的

●前のエクササイズと同様です。

練習方法

●前のエクササイズと同様です。

前ページより続く

b #2

Musical notation for the first system on page 42. The right hand plays a melodic line starting with a quarter rest, followed by quarter notes G4, A4, B4, and a half note C5. The left hand plays a bass line with a quarter rest, followed by chords B \flat , F, and C.

Musical notation for the second system on page 42. The right hand has a whole rest. The left hand has a quarter rest, followed by chords B \flat , F, and C.

Musical notation for the third system on page 42. The right hand plays a melodic line starting with a quarter rest, followed by quarter notes G4, A4, B4, and a half note C5. The left hand plays a bass line with a quarter rest, followed by chords B \flat , F, and C.

Musical notation for the fourth system on page 42. The right hand has a whole rest. The left hand has a quarter rest, followed by chords B \flat , F, and C.

Musical notation for the first system on page 43. The right hand plays a melodic line starting with a quarter rest, followed by quarter notes G4, A \flat 4, B4, and a half note C5. The left hand plays a bass line with a quarter rest, followed by chords B \flat , F, and C.

Musical notation for the second system on page 43. The right hand has a whole rest. The left hand has a quarter rest, followed by chords B \flat , F, and C.

Musical notation for the third system on page 43. The right hand plays a melodic line starting with a quarter rest, followed by quarter notes G4, A \flat 4, B4, and a half note C5. The left hand plays a bass line with a quarter rest, followed by chords B \flat , F, and C.

Musical notation for the fourth system on page 43. The right hand has a whole rest. The left hand has a quarter rest, followed by chords B \flat , F, and C.

次ページへ続く

前ページより続く

c #3

The first system on page 44 consists of two staves. The upper staff is in treble clef with a common time signature (C). It begins with a whole rest, followed by a quarter note G4, an eighth note A4, and a quarter note B4. The lower staff is in bass clef with a common time signature. It starts with a whole rest, then a half note chord of Bb3 and F3, and finally a half note chord of C3 and G2. Chord symbols Bb, F, and C are written above the bass staff.

The second system on page 44 consists of two staves. Both the upper and lower staves begin with whole rests. The lower staff then plays a half note chord of Bb3 and F3, followed by a half note chord of C3 and G2. Chord symbols Bb, F, and C are written above the bass staff.

The third system on page 44 consists of two staves. The upper staff begins with a whole rest, followed by a quarter note Bb4, an eighth note A4, and a quarter note G4. The lower staff plays a half note chord of Bb3 and F3, followed by a half note chord of C3 and G2. Chord symbols Bb, F, and C are written above the bass staff.

The fourth system on page 44 consists of two staves. Both the upper and lower staves begin with whole rests. The lower staff then plays a half note chord of Bb3 and F3, followed by a half note chord of C3 and G2. Chord symbols Bb, F, and C are written above the bass staff.

The fifth system on page 44 consists of two staves. The upper staff begins with a whole rest, followed by a quarter note Bb4, an eighth note A4, and a quarter note G4. The lower staff plays a half note chord of Bb3 and F3, followed by a half note chord of C3 and G2. Chord symbols Bb, F, and C are written above the bass staff.

The first system on page 45 consists of two staves. Both the upper and lower staves begin with whole rests. The lower staff then plays a half note chord of Bb3 and F3, followed by a half note chord of C3 and G2. Chord symbols Bb, F, and C are written above the bass staff.

The second system on page 45 consists of two staves. The upper staff begins with a whole rest, followed by a quarter note Bb4, an eighth note A4, and a quarter note G4. The lower staff plays a half note chord of Bb3 and F3, followed by a half note chord of C3 and G2. Chord symbols Bb, F, and C are written above the bass staff.

The third system on page 45 consists of two staves. Both the upper and lower staves begin with whole rests. The lower staff then plays a half note chord of Bb3 and F3, followed by a half note chord of C3 and G2. Chord symbols Bb, F, and C are written above the bass staff.

The fourth system on page 45 consists of two staves. The upper staff begins with a whole rest, followed by a quarter note Bb4, an eighth note A4, and a quarter note G4. The lower staff plays a half note chord of Bb3 and F3, followed by a half note chord of C3 and G2. Chord symbols Bb, F, and C are written above the bass staff.

The fifth system on page 45 consists of two staves. Both the upper and lower staves begin with whole rests. The lower staff then plays a half note chord of Bb3 and F3, followed by a half note chord of C3 and G2. Chord symbols Bb, F, and C are written above the bass staff.

exercise 13

rock comping ● ロック・コンピング

Chords: C, B \flat

Chords: F, C

Chord: B \flat

Chords: F, G

Chord: G

主な目的

- ストレートな8ビート・ロックのコンピングです。左手で8分のベースラインを弾きながら、右手でシンコペイトしたリズムを弾く練習です。

練習方法

- メトロノームはすべての拍で鳴らします。
- アグレッシヴなロック・フィールで弾きましょう。

ポイント

- 私がどこにアクセントを置いているかをビデオで確認し、それと同じ感じで弾いてください。

補足

- グルーヴを出すのは意外と難しいものです。自分の演奏を録音して聴いてみましょう。自分がどう弾いているかがよくわかるはずです。

exercise 14

rock/blues phrasing technique, key G

●ロック/ブルース・フレーズング・テクニック(key G)

Slow Blues

half note = 42

G7 C7 G7 D7 C7 G7 D7

主な目的

- ブルースやロックのリックを弾く時の両手のポジションを示したスロー・ブルースのエクササイズです。

練習方法

- メトロノームを ♩=42に設定し、実際のスロー・ブルースの曲を弾く感じで練習します。
- 私の演奏や、自分の知っている本格的なスロー・ブルースを思い浮かべながら、それと同じような感じが出るよう努めてください。

ポイント

- 手のポジションに注意してください。
- 自分の思っているサウンドと、自分が実際に出しているサウンドにズレがなくなるまでがんばりましょう。最終的には、頭で考えなくても自

分の手からフレーズが自然に流れ出るようになってください。

補足

- 各フレーズがコードのルートまたは5thで終わっている点に注目してください。

exercise 15

mixolydian thirds, key G ●ミクソリディアン・サード (key G)

Shuffle quarter note= 140

G7

D7 C7

G7 D7

主な目的

- ミクソリディアン・サード (ミクソリディアン・スケール内の音を使った3度のハーモニー) の下行を使った典型的なブルース、ロックのフレーズです。用途が広いのでぜひ覚えてください。

練習方法

- フィンガリングに注意してください。
- まず片手ずつ練習し、それから両手で弾くようにします。
- 最初はゆっくりしたテンポで構いません。

ポイント

- ストレートな8ビートでも弾いてみましょう。
- 譜面中の×はゴースト・ノートです。完全にヒットするのではなく、それとなく弾いてください。

exercise 16

mixolydian thirds, key C ●ミクソリディアン・サード(key C)

shuffle
quarter note = 140
C7
F7
C7
C7
G7
F7
C7
G7

主な目的

- 同じくミクソリディアン・サードによるフレーズ例ですが、キーはCです。

練習方法

- 前のエクササイズと同様です。

ポイント

- 前のエクササイズと同様です。

補足

- このフレーズは、C、F、G、B^bなどのキーではうまく弾けますが、BやA^bのキーでうまく弾くにはフィンガリングに工夫が必要になるでしょう。

exercise 17

mixolydian thirds, key F ● ミクソリディアン・サード (key F)

主な目的

- キーFの時のミクソリディアン・サードのフレーズ例です。

練習方法

- 前のエクササイズと同様です。

ポイント

- スウィング・フィールでも弾いてみましょう。

補足

- このエクササイズは、ストレートな8ビートのロックン・ロール・ピアノのための練習になります。

exercise 18

mixolydian thirds, key B^b ● ミクソリディアン・サード (key B^b)

Swing half note = 65

B^b7

E^b7

F7

E^b7

B7 B^b7

主な目的

- キーB^bの時のミクソリディアン・サードのフレーズ例です。
- 左手はウォーキング・ベースラインです。

練習方法

- スウィング・フィールで弾いてください。
- こうしたウォーキング・ベースラインを使って、他のキーでも演奏してみましょう。

ポイント

- ウォーキング・ベースラインのエクササイズとしても非常に役立ちます。

PART3

2 Hand Grooves

両手によるグルーヴ

PART3の第一の狙いは、左右の手の独立性を高めることです。

左右の手の独立性は、異なるシンコペーションを持つリズムを両手で同時に弾くような時に特に重要になってきます。ここではそうしたスタイルを含んだエクササイズを紹介しました。

キーボード・プレイヤーには、2つのパートを1つのサウンドとして聴かせる能力が要求されます。この能力が身に付くと演奏の可能性は飛躍的に高まり、面白いアイデアも好きなだけ試せるようになります。

エクササイズの中には難しいものもあるので、あせらずに取り組んでください。あなたよりもテクニックの優れたプレイヤーというのは常にいるものです。しかし、大切なのはテクニックの優劣ではなく、音楽的に、創造的に、音楽を演奏するということなのです。

これらのエクササイズは音楽的なアイデアを提供するために作られたものであって、そこには単に音を弾きこなす以上の意味があります。

エクササイズを難しすぎると感じたら、しばらくは片手だけで練習してみてください。1年かかってもよいのです。テンポを落としてもよいし、小節ごとに細かく区切って練習するのもよいでしょう。難しいところを片手で弾くようなことになっても一向にかまいません。時間をかけて仕上げていけばよいのです。やがて両手で弾けるようになったら、自分の演奏をよく聴き、グルーヴを感じるようにしましょう。

しかしここですぐスピードを上げてはいけません。私の生徒にも、少し弾けるようになるとすぐテンポを上げようとする人がいます。それは音楽性を見失う直前の危険信号とも言えるものです。ですからこの段階で一度自分の演奏を録音し、冷静に聴き返してみましょう。

ファンクのエクササイズでは、あなた自身のファンク・スタイルを築いていくためのテクニック的な出発点ともなるべきものを紹介しました。私のゴースト・ノートの使い方にも注目してください。ゴースト・ノートは完全にはヒットしない音で、パーカッシヴな効果を出せるので、ファンクにおけるキーボード・プレイには欠かせません。私は両手の人差指を使ってたくさんのゴースト・ノートを出しています。これぞ、ファンクの肝であると思います。

左右の手のダイナミクスに変化をつけたり、エクササイズのセクションごとにダイナミクスを変える練習もしてみてください。そして楽器を演奏することの奥深さを味わってください。

ここで紹介するエクササイズには、PART1, PART2で学んだハーモニーに関するアイデアも多く含まれています。そういった点も見逃さないようにしましょう。

exercise 19

“Texas shuffle” comping, key B^b

● “テキサス・シャッフル”コンピング (key B^b)

主な目的

- 典型的なテキサス・スタイルのシャッフルです。ウォーキング・ベースラインとオフ・ビートのコンピングの練習になります。II - V (Cmin7-F7) のターンアラウンドも登場します。

練習方法

- 左手のベースラインと右手のコンピングのコンビネーションによって、快適なスウィング・フィールを出してください。8分のスウィングはこうした両手の交互の動きによって生まれます。
- 他のキーでも練習しましょう。

ポイント

- 右手のコンピングのタイミングに注意してください。うまくハマっているでしょうか。時に速く弾きすぎて、スウィング感を失ってしまうことがあります。
- 逆にタイミングを合わせようとするあまり、引きずった感じの演奏になってしまうことがあります。これもまた曲の感じを損ないます。
- 曲と一緒に演奏するなどして、うまくハマるポイントを見つけ、それを体得しましょう。

exercise20a-d

2 hand funk technique #1

●両手を使ったファンク・テクニック#1

主な目的

- 両手の独立性を高める練習です。両手を使ったファンク・テクニックの基礎も身に付きます。

練習方法

- 私の演奏をビデオでよく見てください。
- キーやテンポを変えた練習もしましょう。

ポイント

- それぞれの音符が右手, 左手のどちらに割り当てられているか注意しながら練習してください。
- リズムにハマっているかどうか確認しましょう。

補足

- 私と同じフィンガリングで弾いてください。そうすれば自分なりのパターンやスタイルを作るのも楽になります。

exercise21

funk groove1, key G ●ファンク・グルーヴ1 (key G)

主な目的

- グルーヴ感を出すのに良い練習です。

練習方法

- 16分音符のタイミングに気を付けて弾いてください。グルーヴがうまくハマっているでしょうか。

ポイント

- 最初は私と同じように演奏してみましょう。私が弾いているゴースト・ノートにも注目してください。ファンクのフィールを出すのには効果的です。

exercise22a-b

2 hand funk technique #2

●両手を使ったファンク・テクニック#2

22a half note =43 4x's

22b 4x's

主な目的

- あなた自身のスタイルの基礎となりうる、両手を使ったファンク・テクニックです。

練習方法

- 最初は片手ずつで練習しましょう。
- 他のキーも試してください。

ポイント

- ×印は左手によるゴースト・ノートです。

補足

- あらゆるドミナント7thのコードで使えるフレーズです。

exercise23a-b

2 hand funk technique #3

●両手を使ったファンク・テクニック#3

23a half note =43 4x's

23b 4x's

主な目的

- やはり両手を使ったファンク・テクニックですが、これまでのエクササイズよりも難しくなっています。

練習方法

- 最初は片手ずつ練習しましょう。
- 他のキーも試してください。

ポイント

- マイナーのファンクでよく聴かれるフレーズです。これを参考にして、自分なりのフレーズを作ってみましょう。

exercise24

“Roots” rock & roll piano

● “ルーツ” ロックン・ロール・ピアノ

quarter note = 165

次ページへ続く

主な目的

- キーCのロックン・ロールで、ロック・ピアノのルーツとも言うべきスタイルです。

練習方法

- メトロノームはすべての拍で鳴らします。それによってストレートな8ビートの感じが出しやすくなるでしょう。

- 難しいエクササイズです。最初は片手ずつ練習しましょう。

ポイント

- 曲の持つフィーリングを大切にしましょう。フィーリングを優先した結果、多少の音が犠牲になるのは構いません。ドライブ感のあるロック的でアグレッシブな演奏をしてください。このスタイルの持つエネルギーを伝えることがもっとも重要なのです。

前ページより続く

Musical score for exercise 25, page 68. It consists of four systems of piano accompaniment. The first system has a C7 chord. The second system has an F7 chord. The third system has C7 and G7 chords. The fourth system has F7, C, and B#9 b13 chords. The music features a complex rhythmic pattern with many beamed notes and rests.

- アグレッシブにプレイすることで、しっかり弾けるようにもなります。これはバッハのインヴェンションでもなければ、ショパンのノクターンでもありません。きれいに演奏する必要はないのです。とにかく思いきりよくプレイしましょう。

exercise25

Latin comping “Montuno”

●ラテン・コンピング“モントゥーノ”

Musical score for exercise 25, page 69. It consists of four systems of piano accompaniment. The first system has Emin7, A7, Dmin7, and G7 chords. The second system has Emin7, A7, Dmin7, and G7 chords. The third system has Cmin7, F7, Bbmin7, and Eb7 chords. The fourth system has Amin7, D7, G, and B#9 b13 chords. The music features a complex rhythmic pattern with many beamed notes and rests. A tempo marking "quarter note = 165" is present at the top right.

主な目的

- ラテン・スタイルのコンピング，“モントゥーノ”的なパターンです。両手によるグルーヴ練習になるだけでなく、弾いていると楽しいので取り上げました。

練習方法

- メトロノームはすべての拍で鳴らします。
- 最初は片手ずつの練習でも構いません。
- リズムにハマっているかどうか確認しましょう。

exercise26

funk groove 2 “Slow super funk”

●ファンク・グルーヴ2“スロー・スーパー・ファンク”

quarter note = 79

主な目的

- 両手の独立性を高める練習です。チャレンジしがいのあるエクササイズです。かなりおいしいフレーズも入っているはずです。

練習方法

- メトロノームはすべての拍で鳴らします。
- 最初は片手ずつ、慣れたら両手で練習します。

ポイント

- かなり難しいはずですが、すぐにできなくてもイライラしないでください。
- 速く弾くこともありません。また演奏が走らないよう注意しましょう。
- 正しく音が弾けたからといって、それがグルーヴのある演奏になっているとは限りません。

補足

- ビデオを見て、左手のゴースト・ノートの出し方を研究してください。グルーヴ感を出すには重要な要素です。そして、それらがうまくハマっているか確認しましょう。

PART4

Jazz Comping, Guide Tone Voicing and Rhythms ジャズ・コンピング／ガイド・トーン・ヴォイシングとリズム

PART4では、ジャズの“ガイド・トーン・ヴォイシング”とコンピング、ウォーキング・ベースについて学びます。

ガイド・トーン・ヴォイシングというのは、7thコードの3rdと7thを主体としたヴォイシングのことです。このふたつの音とルートがあれば、それだけで十分なコード感が出ます。このヴォイシング・テクニクを、ここではⅡ-V(ツー・ファイヴ)によって作られた4小節のコード進行に応用します。

Ⅱ-V進行というのは、マイナー7thコードから、その5度下のドミナント7thコードへ向かう進行のことです。メジャー・キーのダイアトニック・ハーモニーでは、Ⅱは常にマイナー7thコード、Vは常にドミナント7thコードとなります。

そしてⅡ-V-I(ツー・ファイヴ・ワン)という進行は、ジャズに限らずあらゆる音楽に共通して見られるケーデンス(終止形)です。このケーデンスは多くの曲で、多くのコード進行を構成するための重要な要素となっています。ジャズの言語としても非常に重要なものなので、ぜひ覚えてください。

ここでのエクササイズは、皆さんがジャズの複雑なハーモニーをマスターするための重要な一歩となります。登場するヴォイシングはどれも“3rd+7th”にもう1音を加えたものです。その1音はコード・トーンであることもあるし、テンションであることもあります。

これらのヴォイシングは、特に左手によるコンピングにおいて役立ちますが、どちらの手でも弾けるようになってください。そして実際の演奏に活かすようにしてください。

ここではシンコペーションのあるコンピングも扱います。exercise27~30の“b”がそれにあたります。これでタイム感を養ってください。メトロノームを2拍目と4拍目で鳴らすことでスウィング・フィールが身に付きます。

exercise31a-dには4分音符のウォーキング・ベースラインが登場します。ラインを細かく見ると、次のコードのルートに対して半音でアプローチしている部分が多いことに気づくでしょう。このウォーキング・ベースラインのテクニクは、特にコード・チェンジが2拍ごとの進行で威力を発揮します。

各エクササイズのハーモニーが理解できたら、他のキーでも試してみましょ。すべてのキーでこれらのヴォイシングが使えるようになってください。

Voicing 1:

Voicing 2:

ガイド・トーン・ヴォイシングは、“3rd+7th+コード・トーン”，または“3rd+7th+テンション・ノート”で構成されています。

Voicing1では、マイナー・コードの5thとドミナント7thコードのテンションである9thがコモン・トーン(2つのコードに共通するひとつの音)になっています。

Voicing2では、マイナー・コードのテンションである9thとドミナント7thコードのテンションである13thがコモン・トーンになっています。すべてのコードにテンションが入っているため、こちらの方がよりジャジーな響きがします。

コードをヴォイシングする時は、このようにコード同士でコモン・トーンを使うようにしましょう。それによって滑らかなコード進行が出来上がります。

exercise27a-b

guide tone voicings(II-V progression with tension 9, key C)

●ガイド・トーン・ヴォイシング

9thのテンションを加えたII-V進行(key C)

a

half note=55

b: Rhythmic variation.

主な目的

- 4小節のII-V進行を使って、7thコードのヴォイシングの方法を学びます。aが基本形、bがリズムック・ヴァリエーションです。

練習方法

- 7thコードにおけるガイド・トーンとテンションを覚え、ヴォイシングもコンピングのリズムも、まず記憶してしまいましょう。

ポイント

- ヴォイシングのボキャブラリーを増やし、それを実際にキーボードで使いこなせるようにすることが目的です。

補足

- スウィング感ある演奏を心掛けてタイム感をつかみましょう。

exercise28a-b

guide tone voicings(II-V progression with tension 9 &13, key F)

●ガイド・トーン・ヴォイシング

9thと13thのテンションを加えたII-V進行(key F)

a half note = 55

b: Rhythmic variation.

主な目的

- exercise27と同様ですが、キーはFです。マイナー・コードの9thとドミナント・コードの13thがコモン・トーンになっています。リズムック・バリエーションのbは、4拍目の裏から始まります。

練習方法

- 前のエクササイズと同様です。

ポイント

- エクササイズの持つタイム感をつかむようにしましょう。

exercise29a-b

guide tone voicings(II-V progression with tension 9, key G)

●ガイド・トーン・ヴォイシング

9thのテンションを加えたII-V進行(key G)

a half note=55

b: Rhythmic variation.

主な目的

- 前と同様ですが、キーはGです。マイナー・コードの5thとドミナント・コードの9thがコモン・トーンになっています。

練習方法

- 前と同様です。

ポイント

- 最初は頭の中で鍵盤を描き、ヴォイシングを視覚的に把握するようにしましょう。そのうちに鍵盤を思い浮かべなくても弾けるようになります。
- bのコードを左手だけで弾く練習もしましょう。この時は同じオクターヴのポジションを使うようにします。他のエクササイズにもこれを応用してみましょう。

exercise30a-b

guide tone voicings(II-V progression with tension 9&13, key B^b)

●ガイド・トーン・ヴォイシング

9thと13thのテンションを加えたII-V進行(key B^b)

a half note =55

b: Rhythmic variation

主な目的

- 前と同様ですが、キーはB^bです。マイナー・コードの9thとドミナント・コードの13thがコモン・トーンになっています。

練習方法

- 前のエクササイズと同様です。

補足

- すべて身に付いたら、前の3つのエクササイズも含めて他のキーで弾く練習をしてください。その時は、キーCで始まる5度圏に従います。
- キーをどんどん変えて弾く練習をする時は、“始まりのコードは、新しいキーのルートに対して増4度上のマイナー・コードである”と覚えておくと便利でしょう。つまり、新しいキーがBの場合は、そのBに対して増4度上のマイナー・コードであるFmin7から弾き始めるわけです。キーBの時のコード進行を全部書くと“Fmin7/B^b7-E^bmin7/A^b7-C#min7/ F#7-Bmaj7”となります。このようにII-V進行が3回出てきますが、これらは全音ずつ下行し、最後はトニック・コードとなります。
- 異名同音にはあまり神経を使わず、コードを手で覚えるようにしましょう。

exercise31a

ex.27b with “walking” bass ●ウォーキング・ベースを加えた27b

Right hand Tacet 1st. time half note =60

主な目的

- ウォーキング・ベースラインの作り方を学ぶためのエクササイズです。

練習方法

- 最初は左手のベースラインだけで弾き、その後右手を加えます。ベースラインは自分なりに変えても構いませんし、毎回同じに弾く必要はありません。
- スウィング・フィールで弾き、タイム感をしっかり出してください。

ポイント

- コードの変わり目では、次のコードのルートまたは“ターゲット・ノート”に対し、半音上または下からアプローチするようにします。
- 私の演奏を参考にして、自分なりのラインを作ってみてください。
- ここでのウォーキング・ベースラインはコンスタントな4分音符でできています。このあとのエクササイズには8分音符を弾いたものもあり、それは譜面にも書き入れました。

exercise31b

ex.28b with "walking" bass

●ウォーキング・ベースを加えた28b

Right hand tacet 1st. time half note=60

Bmin7 E7 Amin7 D7 Gmin7

C7 Fmaj7 Bmin7 E7 Amin7

D7 Gmin7 C7 Fmaj7

主な目的

- 引き続きウォーキング・ベースラインの練習です。シンコペートしたコンピングも出てきます。

練習方法

- 前のエクササイズと同様です。

ポイント

- 演奏がはしらないようにしてください。
- 左手は、2拍目と4拍目めに軽くアクセントを入れる感じで弾くと良いでしょう。これによりスウィング・フィールが出ます。

exercise31c

ex.29b with "walking" bass

●ウォーキング・ベースを加えた29b

half note = 60

C#min7 F#7 Bmin7 E7 Amin7

right hand tacet 1st. time

D7 Gmaj7 C#min7 F#7 Bmin7

E7 Amin7 D7 Gmaj7

主な目的

- 引き続きウォーキング・ベースラインの練習です。キーはGです。

練習方法

- 前のエクササイズと同じです。

ポイント

- スウィング・フィールで弾くことを忘れずに。

補足

- 右手のタッチに変化をつけてみましょう。スタッカートで弾いたり、音を長くしたり短くしたり、いろいろやってみてください。

exercise31d

ex.30b with "walking" bass

●ウォーキング・ベースを加えた30b

right hand tacet 1st. time

half note = 60

Emin7 A7 Dmin7 G7 Cmin7 F7

Bbmaj7 Emin7 A7 Dmin7 G7

Cmin7 F7 Bbmaj7

主な目的

●引き続きウォーキング・ベースラインの練習です。キーはB^bです。

練習方法

●前のエクササイズと同様です。

補足

- 身についてきたら、前の3つのエクササイズも含めてすべてのキーで練習してください。
- リズムにヴァリエーションをつけたり、ベースラインに対して自分なりのコンピング・パターンを作ってみましょう。

デモ演奏について

demonstration 1

Blues Styles

(Texas Shuffle, Chicago Shuffle, Boogie Woogie, New Orleans Rumba)

demonstration1では、ブルース・ピアノの様々なスタイルを紹介しています。

最初はテキサス・スタイルのシャッフルで、キーはGです。フロイド・ディクソン風の演奏です。

これが次第にシカゴ・スタイルのシャッフルに移行します。キーはGのまま、オーティス・スパンのような感じで弾いています。

次はブギウギ・ロックン・ロール・スタイルです。キーはE^b、プロフェッサー・ロングヘア風の演奏です。

これが切れ目なくニューオーリンズ・ルンバに変わります。キーはFで、これもまたプロフェッサー・ロングヘア風です。

このパフォーマンスを通して、それぞれのスタイルが持つフィール、グルーヴ、テクニックを皆さんに知っていただければと思います。

そしてここで名前を挙げたプレイヤーはもちろんのこと、ジョニー・ジョンソン、パイントップ・パーキンス、ジェームス・ブッカー、ドクター・ジョンなど優れたミュージシャンの音楽を聴いて、彼らの持つニュアンスや微妙なフィーリングをコピーしてみましょう。そしてテクニックよりも、その表現力と感覚を理解するようにしてください。

demonstration 2

Rock Styles

(American rock, "Roots" Rock & Roll)

古典的なロック・ピアノのスタイルです。

キーGのエルトン・ジョン風の演奏から始めています。

グルーヴは次第に増し、エルトンだけでなく、チャック・リーヴェル、ビリー・パウエル、スティーブ・ウィンウッドを思わせる演奏になっていきます。

これがやがて典型的なロックン・ロールに変わります。exercise24とは少し違いますが、スピリットは一緒です。キーはCで、ジェリー・リールイスやリトル・リチャードのスタイルです。この2人のプレイはぜひ学んでください。ジョニー・ジョンソンの演奏も参考になるでしょう。

demonstration 3

Funk Style

(Comping and Improvisation)

フェンダー・ローズを使って典型的なファンクを演奏しています。

キーE^bのハービー・ハンコック・タッチのグルーヴで始まります。

これがやがてビリー・プレストンのようなスタイルに変わり、キーがFになったところでリチャード・ティー的な演奏になります。

このデモンストレーションには、PART3で紹介したような両手によるファンク・テクニクが多数登場します。ダイナミクス(1つのフレーズにおける左右の手によるダイナミクスの違いも含め)、アクセント、ゴースト・ノートに注意してください。

このような演奏では、グルーヴを維持し続けることがとても重要になります。

メトロノームを使うということは、メトロノームのようにプレイするということではありません。メトロノームはリズムにハマっているかどうかを感じたり、ジャストなリズムに対して突っ込み気味か引っ張り気味かをつかむために利用しましょう。また、片方の手はテンポをキープしつつ、もう片方の手では少しだけ前ノリや後ノリのリズムでプレイするなどして、グルーヴの中で異なるニュアンスを出してみましょう。

demonstration 4

Jazz Changes

(Comping and Improvisation)

Fのキーで典型的なコード進行を弾いています。様々なコード・ヴォイスシングとジャズのスウィング感を皆さんに知ってもらうために、このような演奏を行ないました。

インプロヴィゼーションの部分では、PART4で紹介したようなヴォイスシングのコードを左手で弾いています。

したがってPART4のエクササイズをマスターすることはとても大切です。

また、ここで聴かれるようなクロマティック・ツー・ファイヴを演奏することにより、7thコードやテンションの組み合わせに関する知識を深めることができます。クロマティック・ツー・ファイヴとは、マイナー7thコードとドミナント7thコードというツー・ファイヴのシーケンスを半音ずつ下行させていくことです。

demonstration 5 “Just Funky” composed by Tomo Fujita

おわりに

楽しんでいただけたでしょうか。

ここで紹介したエクササイズを、皆さんがすべてのキーで応用してくれることを期待しています。

そして優れたプレイヤーたちの演奏を常に聴くようにしてください。音楽を耳から学ぶのです。

簡単なものから構いません。例えば“今週の1曲”を選び、細部まで研究してみるのも良いでしょう。しかし、それは他のプレイヤーと比較することが目的ではなく、自分の音楽を作ることが目的なのです。

テクニクが一定のレベルに達していないと音楽はできないということはありません。あなたがどんなレベルであれ、自分を表現することは可能なのです。

私はこのビデオに、様々なスタイルの要素をできる限り凝縮して入れたつもりです。皆さんはこの先多くの場面で、このビデオで覚えたハーモニーやテクニクを耳にすることになるでしょう。

例えばブルースのレコードを聴けばミクソリディアン・サードやブルース・テクニクが、ロックを聴けばロックのモチーフやコンピングが、ファンクを聴けばミクソリディアン・トライアドやファンク・テクニクが耳に飛び込んでくるはずですが、ジャズの演奏の中では、ガイド・トーン・ヴォイスシングや左手のコンピングを聴くことができるでしょう。

このビデオのエクササイズは、あくまでも出発点でしかありません。これを基礎にしながら、自分のスタイルを探究していきましょう。皆さんにとってのゴールは、ただ単に音を弾けるようになることではありません。音楽は演奏技術を超えたところに存在します。

もしもその探究の過程を楽しめないとしたら、それはあなたがまだ優れた音楽に出会っていないからかもしれません。ここでもう一度、音楽に出会いましょう。そして感動を体験しましょう。

もし皆さんが今後も私と一緒に学んでいくことを希望しているのならば、ぜひ私のウェブ・サイトを訪ねてください。アドレスはwww.davelimina.comです。

手紙などでのレッスンも受け付けています。ボストンでは個人レッスンも行なっています。ウェブ・サイトでは私の本に関する情報も御覧いただけます。

それでは。Keep on Groovin'!

プロフィール

デイヴ・リミナは1993年からバークリー音楽院の講師となり、1999年より助教授を務めている。現在彼はバークリーで全日複数のクラスとプライベート・レッスンを受け持ち、多忙な日々を過ごしている。彼の授業は常に生徒たちの要望が高く、満員状態である。

彼が1994年に創設した“Roots/Rock”は、バークリーでも特に有名な授業のひとつで、多くの生徒がここでブルース、ニューオーリンズ、ブギウギ、ゴスペルなど、アメリカ音楽のルーツ的なピアノ・スタイルを学んでいる。彼がこの授業のために作り上げた膨大なカリキュラムは、近々本として出版される予定である。

バークリー初の Hammond・オルガン・コース “Hammond Organ Techniques” もリミナが創設したものである。この授業を始めるにあたって彼は自己の Hammond を学校に寄贈。このクラスが大きな反響を呼んだため、その後 “rock styles for Hammond organ” などの新しいクラスもデイヴにより開設された。生徒たちはこれらのクラスで様々なスタイルにおけるオルガンのテクニックだけでなく、Hammond B3 など楽器の歴史についても学んでいる。

リミナは他にもジャズやブルース、ロック、ポップスのカリキュラムを通じて多くの生徒たちを指導してきた。また、クラシックに関する豊富な知識と経験も伝授している。

リミナの演奏の場は世界中に広がっており、レコーディングも数多く経験している。主な共演ミュージシャンには、マイティ・サム・マクレイン、ミッシェル・ウィルソン、B.B.キング、チャック・ベリー、ザ・コースターズ、コーレッジ・ブラザーズ、ブルック・ベントン、ポーラ・コール、ウォーレン・ヒル、スティーヴ・フォーバート、マーサ・リーヴス、デューク・ロビラード、バレンス・ホイットフィールド、トレイシー・ネルソン、ゲイリー・ニコルソンや R.L.カス などがいる。

またトニー賞を受賞したミュージカル『レント』では指揮とキーボードを務めている。

Special Thanks

I would like to thank most of all my Father God for providing me with all that is good and the challenges I learn from in this life.

I would also like to thank the following people who made this video possible:

Sam Kawa

Tomo Fujita

Hiroshi Noguchi

Chiaki Matsumoto

Larry Finn and Anthony Vitti for the killer groove.

My family.

Paul Schmelling for the opportunity to teach at Berklee.

Michelle Willson for the opportunity to play great music with great musicians.

All my students for your support.

And last but not least my wife Amy Beth for playing all the Classic Elton stuff for me.

This video is dedicated to the memory of my father Anthony M.Limina.

キーボードのための
演奏能力開発エクササイズ

『キーボードのための演奏能力開発エクササイズ』解説書

■採譜・解説／デイヴ・リミナ

■翻訳／ミカ・ゴーインズ

■浄書／松尾英樹

■DTP／波多江潤子

■企画制作／株式会社リットーミュージック

※無断複製・転載を禁ずる

VW-178